

子ども施策推進会議主催シンポジウム「目黒の子どもの未来の居場所を考える」(令和4年1月28日開催)

1月28日(土曜日)、目黒区総合庁舎1階E会議室で、シンポジウム「目黒の子どもの未来の居場所を考える」を開催した。



シンポジストと子ども施策推進会議委員

目黒区子ども推進会議では、子どもを中心に、その権利と育ちを守るための取り組みについて検討してきた。令和3-4年度には、「地域の子ども・子育て支援」「教育・保育」「子どもの権利」という3つのグループに分かれて、子どもと子育てについて実情を把握し、望まれる取り組みについて検討を行ってきた。

このシンポジウムでは、目黒区の子ども・子育て支援について検討を積み重ねてきた結果を踏まえ、他地域で子どもの居場所作りに取り組んでいる3名のかたによる講演と、目黒区で取り組みに携わっている職員2名が指定討論者となり、議論を深めた。

また、シンポジウム開催にあたっては、リアルタイムで配信し、目黒区の住民の方々や実際に子ども支援に携わっている方々と共有した。



宮里 和則氏(子ども冒険ひろば統括プレイワーカー)

宮里 和則氏は、「僕たちが見ている子ども、その子どもの問題、そして子どもたちの未来への提言ができればと考えている。」と話し、遊びは子どもの権利であり、本来、主役の座を譲らないのが子どもだが、子ども自身が自分で決めたりするという主役の座を明け渡しているという実態についての問題定義があった。そのことを通して、周囲の大人が自分の子だけでなく他の子どもにも関心が行くようにするためにはどうしたらいいか、「一人の子どもを育てるには、村中みんなの力が必要だ」という有名なアフリカの言葉を受けて提言があった。



塚本 岳氏 (NPO 法人こども NPO 副理事長)

塚本 岳氏からは、素敵な遊びの場面の紹介があり、遊ぶことで子どもが自ら自分で体験して感じることに、結果ではなくプロセスこそ子どもが育っていくこと、成功体験だけでなく失敗体験も大事であること、そして、子どもには自由に遊べる環境を整え、子ども自身が自分で考えることを大事にしている、と話しがあった。



講演者の後藤 友子氏 (フリー保育士)

後藤 友子氏からは、目黒区での活動、遊び場づくりについて紹介があり、「自分の意志で遊び、やりた

いことを実現する喜びがある。決められたプログラムはなく、細かいルールは子どもたちが自分で決めている。また、色々な子、学年、年齢、大人も一緒に、安心して過ごせる居場所だということを、遊び場づくりを通して感じる。」と話があった。

各講演者への「自分の活動にあと何があったらいいか。」の質問には、宮里氏からは、「一番は街の人の理解。それが必要だと思っている。」、塚本氏からは、「名古屋市緑児童館では、子どもが自分で企画していることにしており、様々な取り組みが一つの館だけにならないよう、様々な働きかけをしている。」、後藤氏からは、「ボランティアで行っているため、人材が完全に不足している。目黒区で同じ思いを持つ大人が増えたらいい。」と回答があった。

指定討論者からは、子どもの居場所としては、目黒区の児童館も子どもたちの居場所であり、0歳から18歳未満の幅広い年齢の子どもに対し役割を果たし、異年齢のつながりを大切にしていること、目黒区の児童館は子どもにとって駆け込み寺である、そんな存在でありたいと思っている、といった話があった。

質疑応答では主に以下のような意見があった。

●質問「人材を育てるには。」

→（宮里氏・後藤氏）毎日振り返りをする時に、色々な話をして、自分の思いを伝えている。共有することで職員間の共通認識に育っていくのではないか。

●質問「アンチの意見が届く気がする。届いた場合はどう対応するのか。」

→（塚本氏）公共の児童館、というと同業者や利用者からと色々な意見はある。ただ、児童館にはガイドラインがある。いろいろな方面から働きかけをして、児童館利用者への理解を深めてもらうように努めている。

●質問「活動支援はどうしているのか。」

→（後藤氏）昨年、ボランティア助成金を申請しベンチや遊具等を買った。人件費はかかるかもしれないが、そんなにお金はかからない。自分の持ち出しはある。他の助成金も申請したいと思っている。カフェ等を活用した活動では、場所代（レンタルスペース代）はかかる。大人、仲間を育てるには今回のような機会を活かすことや、勉強会のようなもので意見を交わせたらいい。

●（指定討論者）子どもの気持ちを受け止めていき、子どもの様子にどういう背景があったのか職員同士も考えていくこと、子どもたちのやりたいことがどんなことで、実現してあげるためにちょっと手を添えてあげるといことが、職員としても大切なことと考えている。

また、講演者の話にあった“子どもたちが主役”というキーワードを改めて職場でも共有し、という立ち位置でどんなことができるのか、改めて考えて取り組んでいきたい。

最後に、子ども施策推進会議会長から、まとめとして次のような話があった。

●実際に現場で自分たちの理想を持ち実現しようと切り開いている方、そして専門職として目黒区の児童館をいかに開いていくのかを心掛けている実際の話を書く事ができた。講演者3名の話には共通して、“生活すること、一緒にいること、専門職の中では会話をし、振り返ること、そうした当たり前の事柄が人材を養成していく”があった。

- 「こども基本法」の制定、子どもの意見表明権、或いは最善の利益が強調されているが、どういう実像としてどういう姿、子ども・地域の姿なのかを議論いただいた。目黒区では来年度ニーズ調査を実施し、次の「目黒区子ども総合計画」の策定にこの子ども施策推進会議は移っていく。その前にこうしたシンポジウムを開き、描いているイメージの共有、語り合ったことは大きな意味があった。私たちが思いを豊かにもちそれを実現していくための計画を立てていくことにご一緒に取り組んでいきたい。